

古典文学研究における計量文献学的手法をめぐって  
—『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』  
『紫式部日記』を題材として—

Remarks on the Bibliometric Analysis in Classical Literature Research  
-With Special Reference to “Sarashina Nikki,” “Hamamatsu Chunagon  
Monogatari,” “Yowanonezame” and “Murasakishikibu Nikki”-

北原 慈子

要旨

平安朝古典文学作品を対象とした計量文献学的研究には、未だ確立した研究手法が存在していない。そこで本稿では、先行研究で展開されてきたいくつかの手法の有用性を、未加工データを開示しつつ改めて検証した。その結果、品詞率、助動詞の種類、助詞・助動詞の連結の分析は、ジャンルの差を明らかにするのに有用ないしは、有用である可能性があることが分かった。他方、これらの手法は、従来の研究では作者の同定・推定にも利用されてきたが、今回の調査ではその方面における有用性を証明するには至らなかった。

キーワード： 計量文献学、『更級日記』、『浜松中納言物語』、『夜半の寢覚』、『紫式部日記』

## 1. はじめに

欧米では、文章の数量的特徴から、文献の分析や比較を行う計量文献学が古くから行われている。その影響のもと、日本においても 1950 年代の終わり頃から、日本語の古い文献に対してこれに類した研究が行われるようになった。しかしその方法論は、未だ模索の段階にある。特に古典文学作品を対象とした研究に関しては、その妥当性すら見極められていないのが現状である。そこで本稿では、平安時代に書かれた四つの文学作品、すなわち『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寝覚』『紫式部日記』を題材として、古典文学研究における計量文献学的手法の有用性を改めて検証してみることにした。

## 2. 先行研究

今日に至るまでの平安朝古典文学を対象とする計量文献学的研究は、『源氏物語』を中心に展開されてきたと言っても過言ではない。その先駆的なものとしては、『源氏物語』の作者について言及した安本(1958)等が挙げられる。『源氏物語』は、一般に紫式部の手になる作品であるとされる。しかし『源氏物語』全五十四帖のなかの一部については、古くから作者が別人であるという説が議論されてきた。とりわけ有名なのは『源氏物語』の最後の十帖、いわゆる「宇治十帖」が別人の手になるとする説であろう<sup>1</sup>。安本(1958)は、この「宇治十帖」の作者について計量文献学的な視点から臨んだのである。同論考は、『源氏物語』を「宇治十帖」とそれ以外の巻にわけ、「直喩の使用度」や「文の長短」等について統計的な分析を試みた。その結果、「宇治十帖の作者は、他の四十四帖と異なるのではないかと思われるのである。」(p.155)と述べるに至っている。

もっとも、「宇治十帖」の作者が誰であったかの問題は、この安本(1958)で決着をみたわけではない。新井(1997)は五十音図の頭子音行別、母音列別の頻度データ等の分析を通じて『源氏物語』正編と続編「宇治十帖」の作者は別人とは考えられない(p.413)という見解を表明した。同様に土山・村上(2012)も、名詞、動詞、形容詞、形容動詞、助詞、助動詞等の使用傾向から、「計量的なアプローチからは「宇治十帖」の作者は「他 38 帖」<sup>2</sup>と異なるとする積極的な根拠は得られなかったと言える。(p.7)と述べている。また村上ほか(1996)は、「宇治十帖」とその他の巻とでは、「ひと／人(名詞)」「もの／物(名詞)」「おもひ／思ひ(動詞)」といった語の使用傾向が異なると指摘するが、同論考は、この結果から「著者が異なると主張するのは現段階では無理があるように思える。」(p.37)と述べ、結論を保留している。さらに村上・今西(1999)も、『源氏物語』の巻の成立順序を考察するなかで、「宇治十帖」とその前に位置する巻とのあいだに、助動詞の出現率の差異を認めているが、その一方で、「ただし、その助動詞出現率の差異は、「宇治十帖」が他作者の手になるものであることを必ずしも意味するものではない。」(p.782)と述べている。これらの諸研究を総括するなら、『源氏物語』「宇治十帖」の作者は、一部不確定要素があるものの、他の巻と同じ紫式部であるとする見方がなお趨勢を占めていると言えるだろう。

さて、ここまで挙げたのは、『源氏物語』に関する論考だが、『源氏物語』以外の作品を対象としたものとしては、石(1987)が挙げられる。この論考は、本稿で扱う『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寝覚』の作者を探ろうとしたものである。この問題に関する詳細は次節の 3.1 項で述べる

予定なので、ここでは石(1987)の研究手順と結論のみを紹介しておく。すなわち同論考は、『更級日記』等の古典文学作品、および近代文学作品計十六作品から、200文字を1単位とした標本を50個抽出し、その標本内における文の長さや品詞の使用傾向に着目した統計分析を行った。その結果、「夜の寝覚」「浜松中納言物語」はともに菅原孝標女の作とするのが妥当と考えられる。」(p.19)と述べているのである。

ところで、この石(1987)の論考にかぎらず、従来の研究では個々の作品の作者の同定ないしは否定(以下、これを作者問題と仮称する)に力点が置かれているものが多いが、むしろそれ以外の視点にたった論考も存在している。たとえば、「個人文体」と「ジャンル文体」の関係性に言及した小林・小木曾(2013)がある。同論考はまず、「あるテキストと別のテキストの間に見られる言語的差異が、書き手の差によるものなのか、ジャンルの差によるものなのか、はたまた年代の差によるものなのか、を見分けることが難しい。」(p.29)という点に着目する。そのうえで「個人文体」と「ジャンル文体」、つまり書き手とジャンルの二つの要素のうち、文体に及ぼす影響がより大きいのはいずれであるか等を調べたのである。題材としているのは、『源氏物語』の一部と、『紫式部日記』『更級日記』で、調査項目は助詞・助動詞の使用傾向である。結論としては、「今回分析したデータにおいては、個人文体よりもジャンル文体の方が差が大きいことが明らかにされた。」(p.41)としている。

以上が今日に至るまでの、平安朝古典文学を対象とした計量文献学的研究の概要である。これ以外のみるべき成果については、その都度適時紹介することにしたいが、とりあえず今日までの研究成果を概観するならば、上述のように作者問題を考察したものが目立っているとさえ言えよう。もちろん計量文献学的研究は、作者問題に終始するものではないが、既往の研究の多くがこの問題を見据えているのは間違いない。そこで本稿の考察においても、作者問題に可能なかぎり留意しつつ論をすすめることにしたい。

### 3. 研究方法

#### 3.1 分析対象とする作品群に関して

前述ように、本稿では『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寝覚』『紫式部日記』の四作品を題材とすることにしたが、最初にそれぞれの作品の関連性について述べておく。

まず、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寝覚』に関してである。これら三作品のうち、『更級日記』は菅原孝標女の作品であることが知られているが、残りの二作品の作者は不明とされている。ただし、『浜松中納言物語』と『夜半の寝覚』は、双方とも『更級日記』の作者たる菅原孝標女の手になる作品ではないかとする説がある。この説は、藤原定家が『更級日記』の奥書に記した記述をもとにしたものであるが<sup>3</sup>、その真偽は現在においても結論をみるに至っていない。それゆえ、先行研究において重視されている作者問題を再吟味する意味からも、これらの三作品は、分析対象として格好の題材だと言えるのである。

とはいえ、菅原孝標女の手になる作品と、その可能性がある作品の対照だけでは、研究方法としてはいささか不十分である。本来ならば、同時代の古典文学作品すべてのなかにおける、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寝覚』の位置関係を明らかにするのが理想だが、短時間

のあいだにそこまで大規模な調査を行うことは容易ではない。そこで今回は、既述の三作品に加えて『紫式部日記』の分析を試みることにした。

『紫式部日記』は、その名のとおり『源氏物語』の作者たる紫式部の日記である。この紫式部と菅原孝標女の作品群の関係性を、上野(1991)は次のように指摘する。「『更級日記』に影響を与えた先行の作品は、『源氏物語』だけにとどまらない。その作者の日記たる『紫式部日記』も、『更級日記』の範とするものであった。自ら日記をものするにあたって、あこがれる『源氏物語』の作者に、日記の作品があったとすれば、それを参照しない方が不自然というものであろう。」(p.15)。この指摘に鑑みれば、『紫式部日記』と『更級日記』はそれぞれ作者は異なるものの、密接な関係にあることがわかる。本稿ではこの関係性に鑑み、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』に加えて『紫式部日記』を分析対象に選定した。

### 3.2 分析手順

先行研究の概観によっても明らかのように、古典文学の計量文献学的研究において使用されてきた手法は、画一的なものではない。取り扱う項目は論考によって区々なのである。また詳述はしなかったが、同項目について調査する場合でも異なる統計手法が用いられ、しかもいずれの手法が適切であるかを、第三者が判断できない場面に遭遇することもある。これは、当該論考の多くが統計処理の結果のみを提示し、その前段階の未加工のデータを掲載していないことによる。

そこで本稿では、先行研究で扱われてきた複数の代表的項目についてパーソナル・コンピュータを用いて調査し、それぞれに関する未加工のデータから、いくつかの分析を試みることにした。取り扱う項目は全部で四点。すなわち、文の長さ、品詞率、助詞・助動詞、助詞・助動詞の連結である。なお、これ以外にも分析すべき項目はあるが、様々な事情により今回の調査には含めていない。以下、具体的な検討に移ることにする。

## 4. 文の長さ

### 4.1 文の長さに関して

文の長さは、計量文献学的手法のなかでも、特に扱いの困難な項目である。というのも、そもそも文の長さの定義そのものが、論考によって全く異なるからである。そこで本格的な分析にはいるまえに、先行研究における文の長さの定義について確認しておきたい。

まず、土山・村上(2014)は、『源氏物語』を中心とする作品群の分析に際して、「活用品詞の終止形、および終助詞・間投助詞」(p.2)を文の切れ目とし、その一文に含まれる語の数を文の長さとして定義した。表1である。

表1 土山・村上(2014)における文の長さの定義

①文の切れ目	「動詞・形容詞・形容動詞・副詞・助動詞といった活用品詞の終止形、および終助詞・間投助詞」(p.2)
②文の単位	一文に含まれる単語数

他方、新井(1997)は文の切れ目を句点、文の単位を文字数としている。表 2 である。

表 2 新井(1997)における文の長さの定義

①文の切れ目	句点(角川文庫本『源氏物語』における)
②文の単位	一文に含まれる文字数(原則として平仮名に修正)
③会話(引用)文中の句点の扱い	「現代風の引用符を省き、地の文と切れ目なく続く場合は会話部の最初の句点を文の切れ目とみなす原則をとっている。」(p.400)
④和歌の扱い	「独立して一文の体をなす場合は文章長の調査ではカットし、地の文や会話文中で前後と一体化している場合は残すこととした。」(p.400)

この表 2 にみる③会話文中の句点の扱い、および④和歌の扱いについて簡単に触れておきたい。まず③に関して、新井(1997)にはこの処理に関する具体的な根拠および例が示されていない。したがって憶測の域をでないが、この処理は会話文中の句点も文の切れ目として換算することを意図しているのではないか、と思われる。つまり、以下に挙げた現代語の例 1 における / の位置を文の切れ目としていると考えられるのである。

例 1) 彼女は私に「そうでしたか。それは大変でしたね」と言った。

→彼女は私にそうでしたか / それは大変でしたねと言った /

このような処理を施さない場合、次のような分析になる。

例 2) 彼女は私に「そうでしたか。それは大変でしたね」と言った。

→彼女は私にそうでしたかそれは大変でしたねと言った /

現代の我々の感覚からすれば、例 1 のような区切り方は不自然であり、例 2 の区切り方のほうが妥当と判断するのではないだろうか。しかし、平安時代には当然のことながら引用符に相当するものは存在しない。それゆえ、当時の人々が例 1 のような区切り方を意識していた可能性は必ずしも否定はできないのである。表 2 の③の処理は、このような考えのもとに確立されたものと推察される。

次に表 2 の④和歌の扱いに関してである。こちらも③と同様、新井(1997)に詳しいことが記載されていないため、あくまでも推察であるが、この処理は和歌の特殊性に起因したものと考えられる。和歌は原則として平仮名三十一文字で記される。これを一文と見なすならば、あらかじめ三十一文字という制約を持つ文の存在を許容することになる。とすると、場合によっては、和歌の多寡によって文の長さが左右されるという事態も起こりうる。表 2 の④の処理は、このことを考慮した末のものであったと考えられるのである。

以上の土山・村上(2014)、新井(1997)のほか、文の長さを分析している論考としては安本(1958)がある。安本(1958)は、『定本源氏物語』における各巻一頁あたりの句点の数を求め、これを文の長さとしている。また石(1987)も、文の長さを調査項目として挙げているが、同論考はその定義についてほとんど明記していないため、詳細を推し量ることは困難である<sup>4</sup>。

このように、文の長さの計測に際して、どのような定義・条件に基づくかは論考によって異なる。しかしこれは、看過されてはならない問題点だろう。なぜなら、文の長さに関する定義・条件の変

動に伴い、計測結果に変化が生じるかもしれないからである。

そこで本稿ではこの点に留意して、次のような手順をふんで文の長さを検討してみることにした。すなわち、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』『紫式部日記』の四作品における文の長さを様々な条件のもと計測し、それぞれのデータから得られる結果を比較するのである。

## 4.2 使用データに関して

### 4.2.1 使用データの概略

分析に使用するデータは表 3 に記した五種類である。

表 3 文の長さに関するデータ一覧

データ番号	文の切れ目	単位	和歌・会話文等の扱い
A-1	日本古典文学大系本における句点	一文に含まれる文字数	会話文や心中表現等は地の文に含まれるものとする。
A-2	新編日本古典文学全集本における句点	一文に含まれる文字数	会話文や心中表現等は地の文に含まれるものとする。
A-3	日本古典文学大系本における句点	一文に含まれる文字数	新井(1997)に基づき、和歌と会話文を整理。
A-4	日本古典文学大系本における句点	一文に含まれる文字数	新井(1997)に基づき、和歌と会話文(心中表現を含む)を整理。
A-5	日本古典文学大系本における句点	一文に含まれる単語数	会話文や心中表現等は地の文に含まれるものとする。

A-1 から A-4 までのデータと A-5 のデータとでは、文の長さを決定付ける単位が異なる。前者は一文に含まれる文字数、後者は一文に含まれる単語数が単位である。文字数を求めるにあたり、漢字は可能なかぎり平仮名に修正する。また、文の切れ目は A-2 のデータのみ新編日本古典文学全集本における句点であり、その他のデータは日本古典文学大系本における句点である。

なお文の切れ目に関しては、上記に挙げた句点ではなく、4.1 項に挙げた土山・村上(2014)のように、活用語の終止形等を採用することも考えられる。同論考は、このような方法をとった理由について、校訂本の違いによって句点の位置が往々にして異なるという事情を挙げている(p.2)。確かに、この事情を考慮するなら、活用語の終止形等を文の切れ目に採用するほうが適切と思われるかもしれない。ところが、実は活用形の解釈も、校訂本によって異なる場合がある。以下は『浜松中納言物語』のある一文を、日本古典文学大系本と新編日本古典文学全集本のそれぞれから引用したものである。

(日本古典文学大系本 p.245)

かたみに涙をせきわびつゝ、冬の夜一夜きこえあかし給。事もまねびやるべき方なし。

(新編日本古典文学全集本 p.168)

かたみに涙を堰きわびつつ、冬の夜一夜聞こえ明かし給ふことも、まねびやるべきかたなし。

ここには「給ふ」を、終止形とするか連体形とするかの解釈の違いが読み取れる。この「給ふ」のように二つ以上の活用形で同じ語形があらわれる場合、活用形の認定は係り結びの有無や、文の大意等を考慮して行われることになるが、文の大意等については、校訂者ないしは研究者個人の解釈の違いによって必ずしも同一の結果には至らない場合がある。つまり、活用形を認定する作業も校訂本に句点を付す作業も、それが個人の裁量により揺れ動く可能性があるという点では、あまり変わりがないのではあるまいか。それゆえ本稿では、第三者によるデータの再現性も考慮して、日本古典文学大系本ならびに新編日本古典文学全集本における句点を、文の切れ目とすることにした。

#### 4.2.2 データ作成(A-1の場合)

4.2.1 項で挙げた五種類のデータの作成方法について以下に記述するが、すべてを個別に述べるのは非効率的である。そこで、基本となる A-1 のデータの作成方法を記したうえで、データごとにどの点を改めたかを示すこととした。

まず、基本の A-1 の作成手順は、次の手順 1～5 のようなものである。

手順 1 : 日本古典文学大系本の本文をもとにした、「大系本文(日本古典文学・叢本)データベース」<sup>5</sup>から、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寝覚』『紫式部日記』の「傍記あり」のデータをコピーして、テキストエディタのサクラエディタ(2. 1. 1. 3)に貼り付ける。

手順 2 : 本文とは直接関係のないタイトル、巻名、および／(スラッシュ)等を削除する。さらに活字版の日本古典文学大系本と照らし合わせ、データベース化に際して発生した入力ミスと思われる箇所を手作業で修正する<sup>6</sup>。

手順 3 : 句点および引用符、( )以外の記号類を削除・整理する。たとえば、「つれ※※」とある場合「※」は踊り字のことであるが、これは「つれづれ」と改めた。

手順 4 : 句点(引用符内の句点を除く)を文の切れ目として、一行一文に整形する<sup>7</sup>。和歌については古典文学大系本において地の文とは別に一行を形成している場合は、その和歌単独で一文とした。

手順 5 : 漢字で表記されている箇所を平仮名に修正。修正にあたっては、原則として日本古典文学大系本におけるルビに従った。ただし、この作業に際しては次のような点に留意している。

- ・歴史的仮名遣いに修正されていないもの、もしくは誤修正されているものは、新編日本古典文学全集本や『日本国語大辞典』を随時参照して修正した。ただし、撥音については「む」とできないものは「ん」のままとしている。
- ・日本古典文学大系本と新編日本古典文学全集本におけるルビ・読みが異なり、さらに『日本国語大辞典』においても複数の読みがみられる場合は、漢字のままとした。
- ・「御」については、日本古典文学大系本に読みが付されている場合であっても、明らかに「み」「ご」と読むべき箇所以外は「御」のままとした。

以上が A-1 の作成の行程である。なお、下記は『更級日記』の A-1 における最初の一文を記したものである。

あづまぢのみちのはてよりもなほおくつかたにおひいでたるひといかばかりかはあやしかりけむをいかにおもひはじめけることにかよのなかにものがたりといふものあんなるをいかでみばやとおもひつつつれづれなるひるまよひみなどにあねままははなどやうのひとびとのそのものがたりかのものがたりひかるげんじのあるやうなどところどころかたるをきくにいとどゆかしさまされどわがおもふままにそらにいかでかおぼえかたらむ。

また、A-1 の内訳を示したものが表 4 である。各作品の総文字数(記号類を除く)における漢字の割合は、おおよそ 0.8%となった(小数点第四位を四捨五入)。

表 4 A-1 データに関して

	仮名文字数	漢字の数	総文字数	総文字数における漢字の割合
更級日記	28,469	242	28,711	0.843
浜松中納言物語	147,195	1,215	148,410	0.819
夜半の寢覚	189,821	1,641	191,462	0.857
紫式部日記	36,275	314	36,589	0.858

#### 4.2.3 データ作成(A-1 以外の場合)

次に、A-2 から A-5 までのデータの作成方法を示す。まず A-2 であるが、これは A-1 における句点、つまり日本古典文学大系本における句点の位置を、新編日本古典文学全集本における位置に改めたものである。本来、日本古典文学大系本と、新編日本古典文学全集本とでは句点の位置ほか、文字や語の違いといった様々な相違があるが、今回はこれについては考慮しない。

A-3 および A-4 は、4.1 項の表 2 としてまとめた新井(1997)に基づき、A-1 のデータを整理したものである。A-3 と A-4 で大きく異なるのは、心中表現の扱いである。新井(1997)は、『源氏物語』の分析にあたり、原則として角川文庫本に基づいてテキストデータを作成している。ゆえに新井(1997)が示すところの「会話(引用)」も角川文庫本の引用符によっていると考えるのが自然だろう。ところが、角川文庫本『源氏物語』に従うだけでは、会話文のみの削除は不可能である。なぜなら、角川文庫本『源氏物語』は、会話文のみならず、心中表現にも引用符をあてているからである。新井(1997)は角川文庫本『源氏物語』における引用符でくられた箇所をすべて「会話(引用)」とみなしたのか、あるいは心中表現だけは除いたのか、同論考内にはこれに関する詳しい説明はみられない。A-3 と A-4 はこのことを考慮し、心中表現の取り扱いが異なるように設定したデータなのである<sup>8</sup>。

最後に A-5 に関してだが、このデータは他のデータとは異なり、テキストに対して形態素解析を行ったものである。手順は次の通り。



手順 6 : A-1 の作成過程における手順 3 を経たあと、形態素解析を行う。解析作業には補助ソフトウェア「和文茶まめ」を利用し、形態素解析用辞書に「中古和文 UniDic Ver. 1. 4」、解析器に「MeCab 0.996」をそれぞれ用いている。この解析結果を下記表 5 のようなかたちで Excel ファイル(.xlsx)に出力する。

表 5 『更級日記』の解析例

文境界	書字形	発音形	語彙素読み	語彙素	品詞	活用型	活用形	語形	語種
B	あづまぢ	アズマジ	アズマジ	東路	名詞-普通名詞-一般			アズマジ	和
I	の	ノ	ノ	の	助詞-格助詞			ノ	和
I	道	ミチ	ミチ	道	名詞-普通名詞-一般			ミチ	和
I	の	ノ	ノ	の	助詞-格助詞			ノ	和
I	はて	ハテ	ハテ	果て	名詞-普通名詞-一般			ハテ	和
I	より	ヨリ	ヨリ	より	助詞-格助詞			ヨリ	和
I	も	モ	モ	も	助詞-係助詞			モ	和
I	,			,	補助記号-読点				記号

手順 7 : 解析結果には「発音形」や「活用型」等の様々な項目が表示されるが、「書字形」と「品詞」の項目のみを残して、他要素は非表示に設定する。

手順 8 : 手順 7 のデータをコピーしてサクラエディタ(2. 1. 1. 3)に貼り付け、一行一文に整形する。このとき、各形態素のあいだには半角スペースをおき、「書字形」と「品詞」は「\_」(半角アンダーバー)で繋がるよう設定する。

この手順 6~8 を経て得られたのが A-5 である。『更級日記』の A-5 のデータは、次のように整理された状態となる。

あづまぢ\_名詞-普通名詞-一般 の\_助詞-格助詞 道\_名詞-普通名詞-一般 の\_助詞-格助詞  
 はて\_名詞-普通名詞-一般 より\_助詞-格助詞 も\_助詞-係助詞

なお、本来は形態素解析の結果に対して、解析エラーを手作業で修正するという行程をふむ必要があるが、今回はこれを省略している<sup>9</sup>。

以上が、用意したデータの概略である。

### 4.3 分析結果

本項では、A-1 から A-5 までのデータにおける「文の長さ」の測定結果を示す。測定に際しては、A-1 から A-4 では文字の数、A-5 では語の数を<sup>10</sup>、それぞれ Excel の LEN 関数を利用してカウントした。文字の数、語の数それぞれのなかに、句点等の記号類は含めていない。この結果をまとめたものが、表 6 および表 7 である(小数点第三位を四捨五入)。

表 6 文の長さの分析結果①

		文の数	総文字数	一文あたりの平均文字数
A-1	更級日記	380	28,711	75.56
	浜松中納言物語	840	148,410	176.68
	夜半の寢覚	1,027	191,462	186.43
	紫式部日記	778	36,589	47.03
A-2	更級日記	391	28,711	73.43
	浜松中納言物語	858	148,410	172.97
	夜半の寢覚	1,026	191,462	186.61
	紫式部日記	774	36,589	47.27
A-3	更級日記	380	28,101	73.95
	浜松中納言物語	1,134	147,584	130.14
	夜半の寢覚	1,826	189,417	103.73
	紫式部日記	789	36,309	46.02
A-4	更級日記	389	28,101	72.24
	浜松中納言物語	1,388	147,584	106.33
	夜半の寢覚	2,304	189,417	82.21
	紫式部日記	789	36,309	46.02

表 7 文の長さの分析結果②

		文の数	総語数	一文あたりの平均語数
A-5	更級日記	380	14,739	38.79
	浜松中納言物語	840	73,059	86.98
	夜半の寢覚	1,027	93,194	90.74
	紫式部日記	778	17,492	22.48

#### 4.4 結果の考察

まず A-1 および A-2 に関して考察する。A-1 は日本古典文学大系本、A-2 は新日本古典文学全集本の句点を文の切れ目としたデータである。両者における数値はほとんど変動していない。したがって、今回の調査結果からは、校訂本の違いによって作品の文の長さが大きく変化することはなかったと判断できよう。

次に A-5 に関してである。A-1 や A-2 が一文に含まれる文字の数をカウントしたものであるのに対し、A-5 は一文に含まれる語の数を求めたものである。双方は当然のことながら数値そのものは大きく異なるが、その指し示す傾向はほぼ一致している。すなわち、日記文学よりも物語文学のほうが大きい値を示し、かつ『夜半の寢覚』『浜松中納言物語』『更級日記』『紫式部日記』の順に値が小さくなるのである。新井(1997)は、文の長さの測定について「単語数により文章長を量る印欧語的手法を安易に採用することはできない」(p.399)という慎重な見解を示し、語ではなく、文字を単位とする手法をとっている。しかし、上記の結果に鑑みれば、文字と語のいずれを文の単位としても得られる結果は変わらない、ということになるのではなかろうか。他のデータに着目すると、むしろ問題なのは和歌や会話文等の扱いに関することであると考えられる。

A-1・A-2・A-5 と比較するなら、A-3 には明らかに異質の傾向があらわれている。まず日記と物

語というジャンルごとの傾向を、A-3 から読み取ることは難しい。また、A-1・A-2・A-5 のなかで文の長さの平均値が最も大きかったのは『夜半の寢覚』であったが、A-3 では『夜半の寢覚』よりも『浜松中納言物語』における値のほうが大きくなっている。さらに A-4 に至っては、『更級日記』と『夜半の寢覚』の文の長さが最も近い、という結果が示された。ここにきて日記と物語というジャンルごとの傾向は、完全に確認できなくなったと言えよう。和歌や会話、心中表現等の扱いの変更に伴い、得られる結果が変動したのである。

地の文と、それ以外の文をどのように扱うべきか。これについて議論するには、様々な問題点を考慮しなければならない。まず考えるべきは、そもそも平安時代の作品において地の文とその他の文を区別する必要があるのか、という点である。先にも述べたことであるが、平安時代には引用符は存在しておらず、はたして地の文と会話文といった区別がどの程度意識されていたのか、定かではない。また仮にこの問題を、地の文と会話文の文体差等に着眼して処理しようにも、地の文とその他の文の定義をどのように設定するか、という新たな問題が発生するのではなからうか。いずれにせよ、これらの諸問題の解決は決して容易なことではないだろう。

これらの所見を総合するならば、表 6 および表 7 から、信頼性の高いデータを特定することは現段階では困難ではなからうか。本稿筆者としては、物語よりも日記における文のほうが短いことを示す A-1・A-2・A-5 あたりのデータを支持したいところではあるが、上記のような未解決の問題が残されている以上、安易な判断は回避すべきであろう。それゆえ今回の調査では、文の長さという指標の有用性を確認できなかったとせざるをえないのである。

## 5. 品詞率

### 5.1 品詞に関する諸研究

先行研究のなかには、品詞に着目した研究が複数存在する。例えば、安本(1957)は『源氏物語』の各巻から 1,000 文字を抜き出し、そのなかに含まれる名詞、用言、助詞、助動詞等を数えている。また、石(1987)は『更級日記』や『浜松中納言物語』といった諸作品における名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、助動詞、助詞、接続詞等に着眼して統計的な分析を試みている。

以下では、こうした品詞の使用傾向を品詞率としてとらえ、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』『紫式部日記』の四作品における品詞率をみていきたい。

### 5.2 使用データに関して

品詞の分析に際しては、4.2.3 項における A-5 の作成過程で用いた Excel のデータ(.xlsx)を利用する(手順 6 の表 5 を参照)。以下、このデータを B-1 と呼ぶ。

### 5.3 分析結果

B-1 から『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』『紫式部日記』の四作品における総語数(記号類を除く)および、各品詞の数を Excel の検索機能を利用してカウントした。表 8 である。

表 8 B-1 における品詞数(粗頻度)

	更級日記	浜松中納言物語	夜半の寢覚	紫式部日記
動詞	3,009	16,536	21,464	3,341
形容詞	665	3,763	4,946	817
形状詞	90	649	873	143
助詞	4,753	21,687	27,381	5,071
助動詞	1,712	9,528	12,249	1,946
名詞	3,454	14,361	16,772	4,660
連体詞	0	8	22	1
代名詞	302	1,334	1,644	192
副詞	409	2,580	3,818	511
感動詞	8	40	58	15
接続詞	9	35	69	6
接頭辞	126	1,412	2,360	426
接尾辞	202	1,126	1,538	363
合計	14,739	73,059	93,194	17,492

上記はあくまで粗頻度であるため、これを単純に比較することはできない。そこで、総語数を分母として 10,000 語あたりの相対頻度を求めた。表 9 である(小数点第一位を四捨五入)。

表 9 B-1 における品詞率(相対頻度)

	更級日記	浜松中納言物語	夜半の寢覚	紫式部日記
動詞	2,042	2,263	2,303	1,910
形容詞	451	515	531	467
形状詞	61	89	94	82
助詞	3,225	2,968	2,938	2,899
助動詞	1,162	1,304	1,314	1,113
名詞	2,343	1,966	1,800	2,664
連体詞	0	1	2	1
代名詞	205	183	176	110
副詞	277	353	410	292
感動詞	5	5	6	9
接続詞	6	5	7	3
接頭辞	85	193	253	244
接尾辞	137	154	165	208

#### 5.4 結果の考察

前項の結果について以下考察をすすめていく。なお、連体詞、感動詞、接続詞の三種類は得られた数値が非常に小さいため、考察対象から除くものとする。同様に、形状詞についても、「UniDic」独自の分類による品詞であることをふまえて、考察対象から除くものとする。

まず、作者問題を念頭において表 9 をみていくが、結論から言えば、ここで得られた結果は『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』の作者の同定・推定に対して有意義であるとは見なしがたい。というのも他作品との差異が目立ったのは、主として『更級日記』と『紫式部日記』であり、作者不明の『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』に関わるものが一つしかなかったからである。結

果的に、表 9 から読み取れるのはおおよそ以下の三点である。

(a)『更級日記』には接頭辞が少なく、逆に助詞は多い。

(b)『紫式部日記』には代名詞が少ない。

(c)接尾辞は『更級日記』にはやや少なく、『紫式部日記』にはやや多い。

この三つのうち、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寝覚』の作者の同定に有効なのは、強いて挙げるならば、(b)の代名詞の傾向だろうか。紫式部日記の作とされる『紫式部日記』と比較すると、菅原孝標女の著作、もしくはその可能性のある三作品は代名詞の使用頻度が高い。しかし、分析対象の九種類の品詞のうちの一種類にしか、明確な差異が確認されていないうえ、その一種類が先行研究でもほとんど着目されていない代名詞とあっては、ここから作者不明の『浜松中納言物語』『夜半の寝覚』に関する考察を深めていくのは難しいのではないか。もちろん、作者ではなく作品の傾向としてみる場合は、上記(b)のみならず(a)(c)の傾向も有意義なものとなりうるかもしれないが、これは本稿の主旨とは異なるため、これ以上の深入りは避けるものとする。

さて、以上は作者問題に着目した考察であるが、この問題から離れ、改めて表 9 の結果をみると、ここにはジャンル差が反映されているように思われる。ジャンルごとの傾向として指摘できるのは次の二点である。

(d)物語文学は日記文学よりも動詞・形容詞・助動詞・副詞が多用される傾向にある。

(e)日記文学は物語文学よりも名詞が多用される傾向にある。

上記の二点のうち、(d)で挙げた助動詞に関する傾向は、小林・小木曾(2013)の指摘と一致している<sup>11</sup>。この助動詞と、動詞・形容詞等の用言類、そして副詞が物語文学に多くみられるのはなぜか。推測であるが、これには日記と物語の性質が関連しているのではないだろうか。通常、日記文学は作者の周辺の出来事をもとに展開される。これに対して物語文学では、もちろん中心となる主人公は存在するが、主人公とは別の人物が物語の根幹に関わる場合もある。つまり、主人公以外の人物の心理描写や、複雑な人間関係に関する叙述の増加が起こりうるのである。今回得られた(d)の結果は、こうしたジャンルによる文体の違いが、表現の多様性というかたちであらわれたと推測できるのではないだろうか。むしろ、これは数値のみを比較した場合であって、より根本的な考究のためには質的な分析を深める必要がある。本稿は、計量文献学的手法そのものについて述べることを目的とするため、こうした質的分析については言及しないが、今後考察してみる価値があるかと思われる。

次に(e)の名詞の傾向に関してである。名詞は(d)で挙げた動詞等とは異なり、表現の多様性というよりはむしろ、具体物の多様性と関わりがあると考えられる。これに関しては坂東(1990)の研究を挙げておきたい。すなわち同論考は、『枕草子』と『紫式部日記』の文体比較を行うにあたり、名詞率と「素材性」という言葉を関連付けたうえで、名詞の少ない『枕草子』は「素材に頼ることが少なく」(p.64)、逆に名詞の多い『紫式部日記』は「素材に頼ることの多い」(p.64)文章であると、考察している<sup>12</sup>。ここでいう「素材」が具体的にどのようなものを指すのか、同論考内では明らかにされていない。そこで本稿では、試みに普通名詞、固有名詞といった名詞の下位分類に着目した。下記の表 10 は、B-1 のデータから『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寝覚』『紫式部日記』

における普通名詞、固有名詞、数詞の数を求め、それぞれが名詞全体のなかで占める割合(百分率)を示したものである(小数点第三位を四捨五入)。

表 10 B-1 における名詞

	更級日記	浜松中納言物語	夜半の寢覚	紫式部日記
普通名詞	92.24	96.48	97.37	93.71
固有名詞	4.78	1.35	0.80	3.11
数詞	2.98	2.17	1.82	3.18

ここで注目すべきは固有名詞の数値である。日記文学は物語文学よりも固有名詞が多い傾向にある。これをふまえると、日記文学には固有名詞の「素材」が多く含まれており、これが名詞の多用につながるのではないかと推測される。

ただし、ここで看過できないのが、固有名詞の内訳である。名詞の下位分類である固有名詞は、さらに地名や人名等に分類される。この人名・地名に着目して、『更級日記』と『紫式部日記』における固有名詞を分析したところ、その内訳が大きく異なっていた。『更級日記』の固有名詞のうち、人名は35、地名は123、その他が7であるのに対し、『紫式部日記』は人名93、地名45、その他7となっていたのである。

『更級日記』『紫式部日記』は双方ともに日記文学に分類されるものではある。しかし、そこで描写されている内容は必ずしも同質ではない。『平安朝文学事典』は、『更級日記』について「随想的要素も著しく、回想、紀行などの要素もまつわ」(p.270)るものとし、紀行文としての側面を認めている。一方、『紫式部日記』については「単なる中宮御産の有職日記に墮せず、優れた日記文学、人間生活記録となっている。」(p.267)とし、人物批評が含まれていることを指摘している。この記述に鑑みれば、『更級日記』は紀行文としての性質を含有しているがゆえに地名が多く、『紫式部日記』は人間生活記録であるために人名が多い、ということになる。つまり、この二つの日記文学には、確かに名詞が多く、それが固有名詞の多寡に起因しているという共通点がみられる。しかしながら、その背景にある要因は全く異なるのである。したがって、「(e)日記文学は物語文学よりも名詞が多用される傾向にある。」という判断は、現状では必ずしも適切であるとは言いがたいのではないだろうか。

以上の本節の考察から、とりあえずは次の二点を導くことができよう。第一は、品詞率を用いた分析からは、ジャンル差を見出しうる可能性があるという点。第二は、本稿の調査でジャンル差が反映されたと思われるのは、動詞・形容詞・助動詞・副詞の使用傾向であった、という点である。

## 6. 助詞・助動詞

### 6.1 助詞・助動詞に関する諸研究

古典を対象とした計量文献学の研究において、最も多くみられるものの一つに、助詞・助動詞に着目した分析がある。ここでいう助詞・助動詞の分析とは、前節で挙げた品詞全体における助

詞・助動詞の割合ではなく、助詞・助動詞の種類そのものに着目したものである。こうした分析が展開される背景では、日本語の言語的特徴が意識されているらしい。たとえば小林・小木曾(2013)は、助詞・助動詞に着目しており、その理由について、「日本語が膠着語であり、助詞や助動詞が表現の論理や情緒を表すにあたって重要な働きを持っているからである。」(p.32)としている。また、村上・今西(1999)は助動詞に着目する理由の一つとして、「付属語である助動詞は文章の意味内容ではなく陳述、すなわち意味内容の統合にかかわる品詞として、物語の語り口と密接な関連を有するからである。」(p.775)と述べている。

以下ではこれらの所見をふまえたうえで、助詞・助動詞に着目した分析を行う。なお、分析に用いるデータは、前節で挙げた B-1 と全く同じデータである。したがって、以下ではデータについての説明は省略し、分析結果だけを提示するものとする。

## 6.2 分析結果

小林・小木曾(2013)が分析対象としている格助詞・係助詞・終助詞・副助詞・接続助詞に関して、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』『紫式部日記』の四作品を調査した。表 11 である。

表 11 B-1 における助詞(粗頻度)

	更級日記	浜松中納言物語	夜半の寢覚	紫式部日記
格助詞	2,432	10,439	12,248	2,684
係助詞	886	4,896	6,548	1,135
終助詞	63	323	478	54
副助詞	268	1,201	1,739	276
接続助詞	1,101	4,824	6,366	918

また表 11 を、各作品の総語数を分母として 10,000 語あたりの相対頻度に修正したものが、表 12 である。

表 12 B-1 における助詞(相対頻度)

	更級日記	浜松中納言物語	夜半の寢覚	紫式部日記
格助詞	1,650	1,429	1,314	1,534
係助詞	601	670	703	649
終助詞	43	44	51	31
副助詞	182	164	187	158
接続助詞	747	660	683	525

以上が助詞の下位分類に基づいたデータであるが、助動詞については、格助詞や接続助詞に相当する下位分類がないため、上記のような分析を行うことは難しい。そこで、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』『紫式部日記』における全助動詞の頻度をもとにした順位表を

作成することにした<sup>13</sup>。表 13 である。

表 13 B-1 における助動詞の順位表

順位	更級日記		浜松中納言物語		夜半の寢覚		紫式部日記	
	助動詞の種類	頻度	助動詞の種類	頻度	助動詞の種類	頻度	助動詞の種類	頻度
1	なり-断定	397	なり-断定	2292	なり-断定	2861	なり-断定	494
2	たり	249	ず	1274	ず	1641	たり	325
3	ず	194	む	852	む	1073	ず	205
4	き	158	き	666	たり	895	き	108
5	む	123	べし	621	べし	818	む	103
6	ぬ	122	たり	615	ぬ	713	り	91
7	けり	85	ぬ	568	き	610	べし	89
8	べし	71	けり	471	けり	489	せる	81
9	れる	54	り	424	つ	457	けり	79
10	り	35	れる	369	れる	456	ぬ	77
11	られる	34	せる	224	せる	456	れる	49
12	つ	32	つ	206	り	372	させる	47
13	けむ	30	させる	144	させる	299	めり	43
14	せる	29	られる	141	られる	191	つ	35
15	なり-伝聞	22	けむ	124	めり	190	じ	27
16	まし	18	じ	117	じ	169	られる	22
17	めり	13	まし	101	らむ	158	けむ	16
18	らむ	12	らむ	87	まし	112	らむ	15
19	じ	12	めり	84	まじ	107	まほし	11
20	させる	9	まじ	62	けむ	78	なり-伝聞	11
21	まほし	6	まほし	40	まほし	45	まじ	10
22	ごとし	4	なり-伝聞	34	なり-伝聞	43	まし	6
23	まじ	3	むず	9	ごとし	10	ごとし	2
24			らし	1	むず	6		
25			まうし	1				
26			ごとし	1				
合計		1,712		9,528		12,249		1,946

### 6.3 結果の考察

前項にまとめた結果を利用し、助詞・助動詞に関する考察をすすめる。

まず助詞に関してであるが、表 12 に示した助詞の下位分類の一覧において注目されるのは、『紫式部日記』には接続助詞が少ない、という事実である。その意味するところを理解するため、各作品にどのような接続助詞が使われているかを確認したところ、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』の三作品では十一種類の接続助詞が確認されたが、『紫式部日記』で確認されたのは十種類であった。この不足している一種類は接続助詞「も」であるが、このことがそのまま『紫式部日記』の特徴に繋がるとは考えにくい。なぜなら、接続助詞「も」は『更級日記』で 1 回、『浜松中納言物語』で 3 回、『夜半の寢覚』で 5 回というように、そもそもの頻度が極端に少ないからである。したがって、『紫式部日記』は、使用される接続助詞の種類が少ないのではなく、総数そのもの



が、他作品と比べて少ない傾向にあると言わなければならない。

ところで、この接続助詞に関しては、『浜松中納言物語』と『夜半の寢覚』における使用傾向が近いことも注目される。既述の『紫式部日記』における接続助詞の使用傾向と合わせて考えると、この傾向を『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』の作者問題に繋げることが不可能ではないとも思われる。しかし残念ながら、この点は本稿では保留せざるをえないだろう。というのも、『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』における接続助詞の使用傾向と、『更級日記』のそれとが近いとは言えないからである。その他の助詞の下位分類においても、本稿で扱う作者問題に直接役立つと思われる決定的な要素は見当たらない。そうしたことを考慮すれば、表 12 から作者問題について考察することは難しいと言わざるをえない<sup>14</sup>。

また、5.4 項にて指摘した、品詞率とジャンル差の関連性をふまえ、助詞の使用傾向にジャンル差が反映されている可能性についても検討したところ、その可能性が最も高いのは、格助詞であるように思われた。表 12 をみると、格助詞の頻度は『更級日記』『紫式部日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』の順に大きく減少している。とはいえ、この格助詞の使用傾向について、『更級日記』『紫式部日記』を比較した場合と、『紫式部日記』『浜松中納言物語』を比較した場合とでは、そこにみる数値的差異はほとんど変わらない。したがって、助詞の使用傾向の分析からは、作者の同定のみならずジャンル差の証明も難しいのではないかと、思われるのである。

さて、ここまでは助詞に着目してきたが、ここからは助動詞に関して考察していきたい。表 13 を参照するにすぎず、助動詞の使用頻度の未加工データから、作者問題を考察するのは難しいように思われるが、その一方でジャンルごとの傾向はみてとれるのではなかろうか。というのも、高頻度の助動詞第一位から第三位までは、日記文学と物語文学とで、傾向が二分されているからである。とくに完了の助動詞「たり」は、総語数を分母として 10,000 語あたりの相対頻度に修正した場合、『更級日記』で 169、『紫式部日記』で 186 であるのに対し、『浜松中納言物語』では 84、『夜半の寢覚』では 96 となる。もちろんこれは、あくまで数値上の違いであり、本来はここからさらに質的な分析を行わなければならないが、少なくとも単純な頻度のうえからは、作者の違いよりもジャンル差のほうが明確である、という指摘は可能だろう。

以上を総括して、本節では次の二点を指摘しておく。第一は、格助詞や終助詞といった助詞の下位分類からの分析は、本稿で扱った作品の作者問題およびジャンル差認定のいずれに対しても有用であるとは証明しえなかったこと<sup>15</sup>。そして第二は、助動詞の種類ごとの出現傾向からは、ジャンル差が読み取れる可能性があるということである。

## 7. 助詞・助動詞の連結

### 7.1 助詞・助動詞の連結に関して

助詞・助動詞の連結に関して最初に言及したのは、築島(1963)である。同著では漢文訓読語と和文脈の相違点の研究を行うにあたり、助詞・助動詞の連結の調査が行われている。ここでは、助詞・助動詞の連結は次のように定義されている。

例へば、「一語連結」とは「なり」「なる」「なれ」等を謂ひ、「二語連結」とは「なら-ず」「なり-けり」「なる-べし」「なれ-ば」等を謂ひ、「三語連結」とは、「なら-ざら-む」「なり-けり-や」「なる-べき-を」「なれ-ば-こそ」等を謂ひ、斯くして「四語連結」「五語連結」……とするのである。(p.640)

このような助詞・助動詞の連結に着目した研究のうち、計量文献学に類する論考としては、宇都宮(1966)等が挙げられる。宇都宮(1966)は、築島(1963)が明らかにした『源氏物語』や『伊勢物語』等における助詞・助動詞の連結のデータに、『紫式部日記』におけるそれを追加することで『紫式部日記』の文体の特性を示そうとしたものである。また、近年の研究で助詞・助動詞の連結に言及したものとしては、小林・小木曾(2013)がある。同論考は、助詞・助動詞の連結の分析を直接扱ってはいないが、一考の価値があるとしているのである(p.41)。

本節ではこれらの先行研究をふまえ、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寝覚』『紫式部日記』における助詞・助動詞の連結を調査してみた。なお、ここで使用するのは、4.2.3 項で作成した A-5 のデータであるため、分析に利用するデータの説明は省略する。

## 7.2 分析結果

A-5 のデータから助詞・助動詞の連結を抽出し、各作品における一語から六語の連結の異なり数と総数を表 14 に示した<sup>16</sup>。ここで六語連結を最大としているのは、本稿で扱った四作品には七語以上の連結がみられなかったことによる。

表 14 A-5 における助詞・助動詞の連結(粗頻度)

		更級日記	浜松中納言物語	夜半の寝覚	紫式部日記
一語連結	異なり数	126	160	161	120
	総数	6,465	31,215	39,630	7,017
二語連結	異なり数	400	814	951	370
	総数	1,049	5,974	7,955	1,032
三語連結	異なり数	157	652	848	131
	総数	187	1,262	1,606	156
四語連結	異なり数	29	192	221	28
	総数	29	240	283	28
五語連結	異なり数	5	42	34	4
	総数	5	46	39	4
六語連結	異なり数	1	7	2	0
	総数	1	8	2	0

この表 14 は粗頻度であるため、相対頻度や割合に改める必要がある。築島(1963)では、日本古典文学大系における頁数を「言語量」、すなわち分母とし、百分率の値が示されているが、日本古典文学大系の頁数は、必ずしも適当な「言語量」であるとは言いがたい。そこで本稿では、各作品の総語数および総文字数を分母とし、百分率を求めた。

表 15 は総語数、表 16 は総文字数をそれぞれ分母とし、表 14 を百分率に修正したものである

(いずれも小数点第三位を四捨五入)。

表 15 A-5 における助詞・助動詞の連結(総語数を分母とした相対頻度)

		更級日記	浜松中納言物語	夜半の寢覚	紫式部日記
一語連結	異なり数	0.85	0.22	0.17	0.69
	総数	43.86	42.73	42.52	40.12
二語連結	異なり数	2.71	1.11	1.02	2.12
	総数	7.12	8.18	8.54	5.90
三語連結	異なり数	1.07	0.89	0.91	0.75
	総数	1.27	1.73	1.72	0.89
四語連結	異なり数	0.20	0.26	0.24	0.16
	総数	0.20	0.33	0.30	0.16
五語連結	異なり数	0.03	0.06	0.04	0.02
	総数	0.03	0.06	0.04	0.02
六語連結	異なり数	0.01	0.01	0.00	0.00
	総数	0.01	0.01	0.00	0.00

表 16 A-5 における助詞・助動詞の連結(総文字数を分母とした相対頻度)

		更級日記	浜松中納言物語	夜半の寢覚	紫式部日記
一語連結	異なり数	0.44	0.11	0.08	0.33
	総数	22.52	21.03	20.70	19.18
二語連結	異なり数	1.39	0.55	0.50	1.01
	総数	3.65	4.03	4.15	2.82
三語連結	異なり数	0.55	0.44	0.44	0.36
	総数	0.65	0.85	0.84	0.43
四語連結	異なり数	0.10	0.13	0.12	0.08
	総数	0.10	0.16	0.15	0.08
五語連結	異なり数	0.02	0.03	0.02	0.01
	総数	0.02	0.03	0.02	0.01
六語連結	異なり数	0.00	0.00	0.00	0.00
	総数	0.00	0.01	0.00	0.00

### 7.3 結果の考察

前項で得られた結果について具体的な考察をすすめていくが、その対象を三語連結までとすることをまず断っておきたい。というのも、少なくとも本稿における調査では、四語以上の連結の分析に、十分な意義を見出し得なかったからである。表 14 をみると、四語連結では日記文学における異なり数および総数のいずれもが非常に少ないうえに、異なり数＝総数の図式が読み取れる。たとえば、『更級日記』には二十九種類の四語連結があるが、いずれも作品内には一度しか登場しないということである。また、物語文学は日記文学と比較すると、異なり数・総数ともにある程度の数が確認されているが、三語連結までと比較すると、一度しかあらわれない連結が多いことも事実である。こうした事情により、本稿における助詞・助動詞の連結の分析は、三語連結までを対象とすることにした。

では、一語・二語・三語連結について考察していく。表 15 および表 16 における異なり数に着目すると、一語・二語連結にはジャンルごとの傾向が確認される。すなわち、物語文学よりも日記文学の数値のほうが大きいのである。他方、三語連結の異なり数は、四作品のなかでは『更級日記』における数値が最も高いが、『紫式部日記』におけるそれは最も低くなっており、先述したようなジャンルごとの傾向は確認されなかった。

次に総数についてであるが、表 15 および表 16 をみると、一語連結の数値は、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』『紫式部日記』の順に小さくなっている。その一方で、二語・三語連結では日記文学よりも物語文学における数値が大きいに思われた。

ここまでの考察を総括するなら、各連結の異なり数・総数からは、ジャンル差を読み取ることも不可能ではないが、その傾向は一貫したものであるとはいいがたい。この差を有意義なものにするためには、さらなる考究が必要であろう。

ところで、上掲のデータから作者問題について考察することは可能だろうか。たとえば三語連結の異なり数では、同じ日記文学である『更級日記』と『紫式部日記』の傾向が一致していないことに注目して、それを作者の違いに結び付けることができるかもしれない。しかしながら、こうした差異を、即座に『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』の作者の同定に利用することは、やはり不可能であろう。『更級日記』にみる三語連結の異なり数の傾向と、『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』の両作品にみるそれとが、類似しているとはいいがたいからである。

ただし、ここでもう少し補足しておきたいことがある。上記の通り、助詞・助動詞の連結からは、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』の作者の同定を行うことは困難である。けれども、ここで得られた知見をさらに深めていけば、作者問題に繋がる糸口を得ることができるのかもしれない。それを示したのが下記の表 17 である。これは、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』『紫式部日記』について、それぞれの作品にみられる連結表現が、他の作品とどの程度共通しているかを示したものである<sup>17</sup>。

表 17 二作品間において共通する助詞・助動詞の連結数(二語連結の場合)

	更級日記	浜松中納言物語	夜半の寢覚	紫式部日記
更級日記		314	340	209
浜松中納言物語	314		580	296
夜半の寢覚	340	580		317
紫式部日記	209	296	317	

一見して明らかなおとおり、『夜半の寢覚』『浜松中納言物語』の二作品間においては、共通する連結表現の数が極めて多い。また、共通する連結数が最も少ないのは『更級日記』と『紫式部日記』の二作品を対比した場合であり、これと比較すると、『更級日記』と『浜松中納言物語』、および『更級日記』と『夜半の寢覚』における共通数は多いと言える。むろん、各作品の総語数が全く異なることを考慮すると、安易な比較はできないだろう。しかしこの結果をみると、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』の作者を同一人物とみる余地も多少は残されているのかもしれない。

今回のように取り扱う作品が四種類だけでは、飛躍した推測は慎まねばなるまいが、具体的な条件設定が可能であるという点において、助詞・助動詞の連結は、品詞率などの抽象的な条件よりも、作者の同定に有用である可能性があるのではないだろうか。

## 8. 結論

以上、文の長さ、品詞率、助詞・助動詞、助詞・助動詞の連結の分析という、四つの計量文献学的手法の有用性について検証してきた。繰り返しになるが、その結果は次のように総括されよう。まず文の長さの検討に関しては、本稿ではその有用性を証明するには至らなかった。他方、品詞率、助動詞の種類分析は、作品のジャンル差の証明に有用なものと考えられる。また、助詞・助動詞の連結の分析においても、ジャンルの違いによるものと推測する数値の差が確認された。しかしながら、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜半の寝覚』の三作品の作者問題に繋がる十分な証拠を発見できなかったことから明らかとなり、上記に挙げたような分析が、作者の同定に有用かどうかの判断は、今後の課題と言わねばならないだろう。

## 9. おわりに

平安朝文学を対象とした計量文献学的研究の手法をめぐっては、実を言えば、本稿では触れることができなかつた点においても、さらに重要かつ根本的な問題が存在している。その最たるものはテキストに関する問題である。

平安時代の文学作品は、そのほとんどすべてに原本が残されていない。それゆえ、後世の人間が残した写本に依拠して研究をすすめるべきでないのである。むしろこれらの写本は、誤字や脱字、さらには原本の一部の脱落といった、様々な問題点を内包したものである。これらの欠点に起因する問題を回避すべく、従来から複数の写本の内容を加味した校訂本が使用されてきたが、それでも原本そのものではないという限界を超えることはできない。また、計量文献学的手法自体についても、克服されるべき課題は多い。2節に引用した小林・小木曾(2013)の言からも窺えるように、一つの言語的差異について、それが作者の違いによるものなのか否かを判断する決定的な方法論は、現状では確立しているとは言えないのである。近代や現代の作品を対象とした研究の成果に基づき、この問題を突き詰めようとする動きもあるが、そもそも平安時代の作品と、近現代におけるそれとを同列に扱うことが、妥当なのかどうかすら明らかではない。

これらの問題について、どのような解決策を提示することができるのか、また解決できない場合の改善策はあるのか。今後はこうした点もふまえて研究をすすめていきたいが、さしあたっては、考察に用いる対象作品を量・質ともに改善する必要がある。計量文献学的手法を取り扱う先行研究のなかには、たとえば『源氏物語』だけを分析対象としている論考が数多く存在するが、一つの作品内で得られた結論が、どの程度信頼に足るものなのかどうかは定かでない。本稿で扱ったのも四作品だけであり、十分なデータ量とは言いがたい。『源氏物語』や、その他の平安時代の文学作品を分析対象に追加したうえで、今後の研究をすすめていきたい。

## 注

- 1 たとえば 15 世紀の一条兼良の『花鳥余情』には、「宇治十帖」の作者は紫式部の娘「大式三位」であるとする説が記されている(『平安朝文学事典』, p.210)。
- 2 ここでいう「他 38 帖」とは、「幻」の巻以前の諸巻とされている(土山・村上(2012) , p.5)。
- 3 「よはのねざめ、みつのはま松、みづからくゆる、あさくらなどはこの日記の人のつくられたるぞ。」(日本古典文学大系本『更級日記』, p.535)。この記述のなかの「よはのねざめ」が『夜半の寢覚』、「みつのはま松」が『浜松中納言物語』をさすとされる。
- 4 石(1987)において、文の長さに関する説明は以下の箇所のみである。「サンプリングは、二〇〇字を単位として無作為に五〇個抽出し、それぞれの中に含まれる各項目を数えた。文の長さは、各標本の平均である。」(同論考 p.3)。
- 5 このデータベースは、国文学研究資料館が公開しているものである。複数の古典作品のテキストデータを個人研究に利用することができ、かつデータの二次的な加工も認められていることに鑑みて、今回はこのデータベースを活用した。
- 6 修正内容は後掲の付属資料 1~6 としてまとめている。
- 7 一行一文に整形するにあたっては、正規表現を利用して下記のイ、ロのような処理を行った。  
イ、文字列 `\r\n` を空白に置換。  
ロ、文字列 `。(?!["]*)` を `。 \r\n` に置換。
- 8 心中表現の定義に関しては、各作品の校訂本ごとに多少の差異が存在するが、今回はこれについては考慮していない。
- 9 手作業修正を行わない状態で、本稿で使用する項目についてサンプリング調査を行ったところ、解析精度は約 97%であった。
- 10 厳密には形態素とすべきところではあるが、本稿では形態素を語と見なすことにした。
- 11 「物語文学と比べて、日記文学における助動詞の頻度が低い。」(小林・小木曾(2013), p.33)。
- 12 「名詞率」について、坂東(1990)は「全自立語数に対する名詞数の割合」(p.64)と定義している(同論考 p.64)。
- 13 Linux (Red Hat Enterprise Linux Server release 6.6) 上で以下の処理を実行した。  
`sort 対象ファイル | uniq -c | sort -rn > 出力ファイル`
- 14 なお、小林・小木曾(2013)は『更級日記』に格助詞が多いことは、書き手による文体の差と見てよいと考えられる。」(p.40)と述べているのであるが、本稿の調査においても『更級日記』に格助詞が多いという点は一致している。しかしながら、表 12 からは『浜松中納言物語』『夜半の寢覚』に同様の傾向をみることはできない。
- 15 本研究においては、本稿で紹介した分析に加えて、格助詞の「は」「も」などさらに細かな種類に着目した分析も行った。しかし、出現順位や頻度の関係性が、表 13 の助動詞におけるそれよりも複雑であり、未加工データによる分析は困難と判断されたため、発表を控えた。
- 16 連結表現の抽出にあたっては、正規表現を利用した。たとえば、一語連結を抽出する場合は、サクラエディタ(2.1.1.3)の Grep で次のような文字列を検索した。

\S+(助詞|助動詞)(\S+)?

また、二語以上の連結を抽出する場合は、上記の文字列を半角スペースをはさんで繰り返すという方法をとった。

17 Linux (Red Hat Enterprise Linux Server release 6.6) の comm コマンドを利用して調査した。

## 引用文献

- (1)新井皓士(1997)「源氏物語・宇治十帖の作者の問題 一つの計量言語学的アプローチ」『一橋論叢』 117(3), 397-413.
- (2)上野英二(1991)「更級日記と文学史」『成城國文學論集』 第 21 輯, 1-36.
- (3)宇都宮睦男(1966)「紫式部日記の文体 一助動詞・助詞の連結から見た一」『国語教育研究』 11 号, 65-71.
- (4)岡一男(編)(1972)『平安朝文学事典』 東京堂出版
- (5)小林雄一郎・小木曾智信(2013)「中古和文における個人文体とジャンル文体一多変量解析による歴史的資料の文体研究一」『国立国語研究所論集』第 6 号, 29-43.
- (6)石純姫(1987)「多変量解析による文体分析一孝標女をめぐって一」『中央大学大学院論究』 Vol.19, No.1, 1-19.
- (7)築島裕(1963)『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』 東京大學出版會
- (8)土山玄・村上征勝(2012)「語の使用頻度の計量分析による宇治十帖他作者説の検討」『情報処理学会研究報告』 Vol.2012-CH-94, No.5, 1-8.
- (9)土山玄・村上征勝(2014)「平安時代の文献における文の長さについての計量分析」『情報処理学会研究報告』 Vol.2014-CH-101, No.1, 1-6.
- (10)坂東久美(1990)「『枕草子』と『紫式部日記』における文体の比較研究」『徳島大学国語国文学会』 第 3 号, 64-69.
- (11)村上征勝・上田英代・今西祐一郎・樺島忠夫・藤田真理・上田裕一(1996)「源氏物語の文章の統計分析」『情報処理学会研究報告』 Vol.96, No.73, 33-38.
- (12)村上征勝・今西祐一郎(1999)「源氏物語の助動詞の計量分析」『情報処理学会論文誌』 Vol.40, No.3, 774-782.
- (13)安本美典(1957)「宇治十帖の作者一文章心理学による作者推定一」『文学・語学』 第 4 号, 27-35.
- (14)安本美典(1958)「文体統計による筆者推定一源氏物語、宇治十帖の作者について一」『心理学評論』 Vol.2, No.1, 147-156.

## 使用テキスト

- (1)池田龜鑑・岸上慎二・秋山虔(校注)(1958)『枕草子・紫式部日記 日本古典文学大系 19』 岩波書店
- (2)遠藤嘉基・松尾聰(校注)(1964)『篁・平中・濱松中納言物語 日本古典文学大系 77』

岩波書店

- (3) 阪倉篤義 (校注) (1964) 『夜の寝覚 日本古典文学大系 78』 岩波書店
- (4) 鈴木知太郎・川口久雄・遠藤嘉基・西下経一 (校注) (1957) 『土左・かげろふ・和泉式部・更級日記 日本古典文学大系 20』 岩波書店

参考 URL、利用ツール

- (1) 国文学研究資料館「大系本文(日本古典文学・囃本)データベース」 <https://base3.nijl.ac.jp/>
- (2) ジャパンナレッジ『新編日本古典文学全集』『日本国語大辞典』 <http://japanknowledge.com/>
- (3) 「サクラエディタ(2.1.1.3)」 <http://sakura-editor.sourceforge.net/>
- (4) 「中古和文 UniDic Ver.1.4」  
<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?UniDic%2F%C3%E6%B8%C5%CF%C2%CA%B8UniDic>
- (5) 「和文茶まめ (Windows パッケージ)」  
<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?UniDic%2F%C3%E6%B8%C5%CF%C2%CA%B8UniDic>
- (6) 「MeCab 0.996」 <http://code.google.com/p/mecab/downloads/list>



付属資料

付属資料1 『更級日記』『紫式部日記』における修正内容

作品名と大系本頁数	データの本文	修正内容	修正後
更級日記 p.505	涙(なみだ)をほろ++と落(おと)して、	読点の一つ余分。	涙(なみだ)をほろ++と落(おと)して、
紫式部日記 p.447	八百萬(やおよろづ)の神も耳ふり立てぬは	「やおよろづ」ではなく「やおよろづ」。	八百萬(やおよろづ)の神も耳ふり立てぬは

付属資料2 『浜松中納言物語』における修正内容

大系本頁数	データの本文	修正内容	修正後
157	人目(み)には、その事をおぼえ	「人目(み)」ではなく「人目(め)」。	人目(め)には、その事をおぼえ
165	人も聞(き)かず。のどやかなる御物語の	「聞(き)かず」の直後は読点ではなく句点か。	人も聞(き)かず、のどやかなる御物語の
166	宮仕(つか)へつかまつりては、	「宮仕(つか)」ではなく「宮仕(づか)」。	宮仕(づか)へつかまつりては、
174	恐(をそ)ろしと聞(き)く人の	「恐(をそ)」ではなく「恐(おそ)」。	恐(おそ)ろしと聞(き)く人の
179	あさましきまであぼゆれば	「あぼゆれば」ではなく「おぼゆれば」。	あさましきまでおぼゆれば
230	ひたい((ひ))髪(かみ)の	「髪(かみ)」ではなく「髪(がみ)」。	ひたい((ひ))髪(がみ)の
241	母上(はうえ)の年(とし)ごろの	「母上(はうえ)」ではなく「母上(はうへ)」。	母上(はうへ)の年(とし)ごろの
265	傳(つた)へ申((まうし))侍(ひ)き。	「侍(ひ)き」ではなく「侍(り)き」。	傳(つた)へ申((まうし))侍(り)き。
305	めでたるおぼゆるを、	「めでたる」ではなく「めでたう」。	めでたうおぼゆるを、
329	「大將の朝臣(あそん)の	冒頭の「」が不要。	大將の朝臣(あそん)の
329	位(くらゐ)を高(たか)くなさん事は、我が心なり」	「心なり」の直後の「」が一つ多い。	位(くらゐ)を高(たか)くなさん事は、我が心なり」
337	過(す)ぎぬらんと思(おも)うほどに、	「思(おも)う」ではなく「思(おも)ふ」。	過(す)ぎぬらんと思(おも)ふほどに、
344	隔(へだ)をなく、	「隔(へだ)を」ではなく「隔(へだ)て」。	隔(へだ)てなく、
369	鈍(にび)色、青鈍(あおにび)など	「(あおにび)」ではなく「(あをにび)」。	鈍(にび)色、青鈍(あをにび)など
380	聲(こゑ)もえ忍(しの)ばず	「(こゑ)」ではなく「(こゑ)」。	聲(こゑ)もえ忍(しの)ばず
404	梅(うめ)のつぼにかくしすへ((ゑ))させ	「梅(うめ)の」の「の」が不要。	梅(うめ)つぼにかくしすへ((ゑ))させ

## 付属資料3 『夜半の寢覚』における修正内容①

大系本 頁数	データの本文	修正内容	修正後
47	御箏(しゃく)の琴(こと)の音、	「(しゃく)」ではなく「(しゃう)」。	御箏(しゃう)の琴(こと)の音、
49	この人のたぐいにてあらんこそ	「たぐい」ではなく「たぐひ」。	この人のたぐひにてあらんこそ
53	僧都(そうづ)の領(りやう)する所 には	「領する」ではなく、「領ずる」。	僧都(そうづ)の領(りやう)ずる所 には
54	容體(やうだい)ほそやかに、	「ほそかに」ではなく「ほそやかに」。	容體(やうだい)ほそやかに、
55	な((ほ))めづらかなり。	「なを」の「を」が抜けている。	なを((ほ))めづらかなり。
56	むくつけくおそろしきに、ものおぼ えず。	「ものおぼえず」ではなく「ものもおぼえ ず」。	むくつけくおそろしきに、ものもお ぼえず。
57	音聞(をとぎ)見ぐるしく、もどきな かるべきさまにてこそ	「なかるべき」ではなく「なかるべき」。	音聞(をとぎ)見ぐるしく、もどきな かるべきさまにてこそ
58	よりおはしてげにいかにあやしく思 (おぼ)さるらむ。	「げに」の直前の「」が抜けている。	よりおはして「げに」いかにあやしく 思(おぼ)さるらむ。
58	ゆくなりなく思ひよりぬるを、	「ゆくなりなく」ではなく「ゆくりなく」。	ゆくりなく思ひよりぬるを、
58	よも守(かみ)にはいせはせじ。	「いせはせじ」の「せ」は不要。	よも守(かみ)にはいせはせじ。
58	この御程よりは位(くらい)のあさき	「位(くらい)」ではなく「位(くらゐ)」。	この御程よりは位(くらゐ)のあさき
59	おほんかたの親(おや)	「おほんかた」の「ん」は不要か。	おほかたの親(おや)
62	宮、いとよき人に思(おぼ)したる ++もあり。	++の直前の「人」が抜けている。	宮、いとよき人に思(おぼ)したる 人++もあり。
63	「兄(せうと)にこそめさめ」	「こそ」ではなく「こそは」。	「兄(せうと)にこそはめさめ」
64-65	刈萱(かるやか)のうへの	「かるやか」ではなく「かるかや」。	刈萱(かるかや)の
65	もちあるべきものには侍れ。	「もちある」ではなく「もちあらる」。	もちあらるべきものには侍れ。
66	なぬばかりならぬ身の	「なぬばかり」でなく「なにばかり」。	なにばかりならぬ身の
68	わだ心知(し)りのあやまちならね ど、	「わだ」ではなく「わが」。	わが心知(し)りのあやまちならね ど、
68-69	行明(ゆきあきら)に言(い)はせし かば、「いとことやうなるものを、	「言(い)はせしかば、」の直後は「」で はなく「」。	行明(ゆきあきら)に言(い)はせし かば、「いとことやうなるものを、
69	萩原(はぎわら)よりも	「はぎわら」ではなく「はぎはら」。	萩原(はぎはら)よりも
69	よにうけひき、返事などはせじ、	「返事などはせじ」の直後は読点では なく句点か。	よにうけひき、返事などはせじ。
70	よべまかりのぼりあるよし申。	「のぼりある」ではなく「のぼりたる」。	よべまかりのぼりたるよし申。
71	たゞ、よろしく聞(き)かせおはしま して、	「よろしく」の直前の「」が抜けている。	たゞ、「よろしく聞(き)かせおはしま して、
71	こは、いかにしなし奉(たてまつ)る べきにかあらむ。	「べきにあらむ」ではなく「べきにかあら む」。	こは、いかにしなし奉(たてまつ)る べきにかあらむ。
72	ものうちのたまへる(け)はひなど の、	「(け)」の直前の「氣」が抜けている。	ものうちのたまへる氣(け)はひな どの、
84	口固(くちかた)められた給ぬらん 物を、	「た給ぬらん」の「た」は不要。	口固(くちかた)められ給ぬらん物 を、
85	口(くち)をしくも亂れる心かな。	「亂れる」ではなく「亂れぬる」。	口(くち)をしくも亂れぬる心かな。
85	うちとけて出(い)で入(あ)りしつ る。	「入(あ)りしつる」の直後は句点では なく読点か。	うちとけて出(い)で入(あ)りしつ る。
88	きら++しく、あらまほしく見え たり、	「見えたり」の直後は読点ではなく句 点か。	きら++しく、あらまほしく見え たり。
89	ためらひて起(お)きさせ給へ。い とゆゝしくもとて、	「ゆゝしくも」の直後は「」ではなく「 」。	ためらひて起(お)きさせ給へ。い とゆゝしくもとて、
91	心ことにひきつろい給て、	「ひきつろい」ではなく「ひきつろ ひ」。	心ことにひきつろひ給て、
101	對(たい)の御方の參((まゐり)) 給な」と問(と)へば、	「對(たい)の御方」の直前の「」が抜 けている。	「對(たい)の御方の參((まゐり)) 給な」と問(と)へば、
101	對(たい)の君をひかえて	「ひかえて」ではなく「ひかへて」。	對(たい)の君をひかへて
103	うちやすませ給てを』	給ひてを』の直後の「は」は不要。	うちやすませ給てを』
106	夕方(ゆうがた)殿に	「ゆうがた」ではなく「ゆふがた」。	夕方(ゆふがた)殿に
113	繪物(えもの)語(かたご)きなどするも あり、	「(えもの)語」ではなく「(ゑもの)語」。	繪物(ゑもの)語(かたご)きなどするも あり、
113	「けさ、とくものし給((たまひ))ぬ」	「けさ」の直前は「」ではなく「 」。	「けさ、とくものし給((たまひ)) ぬ」

付属資料 4 『夜半の寢覚』における修正内容②

大系本 頁数	データの本文	修正内容	修正後
120	いとあつく温(ぬる)みいでて、	「>」の前後の( )が抜けている。	いとあつく温(ぬる)みいでて(>)、
120	終(つゐ)の別は、さてのみやは	「終」の直前の「」が抜けている。	「終(つゐ)の別は、さてのみやは」
121	「氣色(けしき)あやし」と、おぼしと がめてむ。」	「とがめてむ」の直後の句点と「」が逆 か。	「氣色(けしき)あやし」と、おぼしと がめてむ」。
124	なみだにいと迷いぬるかな	「迷い」ではなく「迷ひ」。	なみだにいと迷ひぬるかな
129	參(まい)りつきて侍しば、	「侍しば」ではなく「侍しかば」。	參(まい)りつきて侍しかば、
134	思(おも)ひなやむことも侍らず。	「侍らず」の直後は句点ではなく読点 か。	思(おも)ひなやむことも侍らず、
137	この主(あるじ)の尼(あま)の女(むすめ)、	「尼(あま)」の直後の「君」が抜けてい る。	この主(あるじ)の尼(あま)君の女 (むすめ)、
139	聞(き)かばこそよかれめ。	「よかれめ」ではなく「よからめ」。	聞(き)かばこそよからめ。
144	なを((ほ))例(れい)ならぬさまを	「ならぬさま」ではなく「ならぬさま」。	なを((ほ))例(れい)ならぬさまを
144	もてかしづききこえ給へるさまは	「給へるさまは」の「き」は不要。	もてかしづききこえ給へるさまは
144	ひとつの御車にのり給ひて	「ひとつの御車」の「の」は不要か。	ひとつ御車にのり給ひて
144	殿(との)に參(まい)給て、	「參(まい)」の直後の「り」が抜けてい る。	殿(との)に參(まい)り給て、
146	思((おほひ))もなくて	「おほひ」ではなく「おもひ」。	思((おもひ))もなくて
147	いがでか見(み)せ奉(たてまつ)ら ん。	「いがでか」ではなく「いかでか」。	いかでか見(み)せ奉(たてまつ)ら ん。
148	姫君むかへられて給てのち、	「むかへられて」の「て」が不要。	姫君むかへられ給てのち、
148	よもし侍らじときこえても、	「侍らじ」の直後の「」が抜けてい る。	よもし侍らじときこえても、
149	あるかなきかなりし火影(ほかげ) に、	「あるかなきかなりし」ではなく、「あるか なきかなりし」。	あるかなきかなりし火影(ほかげ) に、
151	見(み)とがめなきこえ給はむこと も、	「見(み)とがめなきこえ」の「な」が不 要。	見(み)とがめきこえ給はむことも、
151	もてはやしきこゆることもなにをば	「なにをば」ではなく「なきをば」。	もてはやしきこゆることもなきをば
152	いとづなつかしからぬ心地(ち)し て、	「なつかしからぬ」ではなく「なつかし からぬ」。	いとづなつかしからぬ心地(ち)し て、
152	人聞(ひとぎ)きはづかしかるべき 事をなむ、	「(ひとぎ)」の直後の「き」の位置がお かしい。	人聞き(ひとぎ)はづかしかるべ き事をなむ、
154	おなじ名(な)にこそあれ。	「あなれ」の「な」が抜けている。	おなじ名(な)にこそあなれ。
156	さまでのたまふべき人におはしま さず思(おも)ふに、	「おはしまさず」の直後の句点が抜けて いるか。	さまでのたまふべき人におはしま さず。思(おも)ふに、
156	例(れい)のやうなるお((を))りすく なく、	「お((を))りすくなく」の直後はコンマで はなく読点。	例(れい)のやうなるお((を))りす くなく、
158	この寢(しん)殿にむかへ奉(たて まつ)らんと、思(おぼ)しなりぬ。」	「思(おぼ)しなりぬ。」の直後の「」は 不要。	この寢(しん)殿にむかへ奉(たて まつ)らんと、思(おぼ)しなりぬ。
159	また、中將といふ人、「など、それ こそなを((ほ))めでたけれ。	「など」の直後は読点ではなく句点か。	また、中將といふ人、「など。それ こそなを((ほ))めでたけれ。
159	心こそ女よ。」と言(い)ふを、	「女よ」の直後の句点は不要か。	心こそ女よ。」と言(い)ふを、
159	聞(き)おとされて、	「聞(き)」ではなく「聞(き)き」。	聞(き)きおとされて、
163	人聞き(ぎ)もいとうたて。	「(ぎ)」ではなく「(ぎ)」。	人聞き(ぎ)もいとうたて。
165	おなじ筋(すじ)のことを、	「(すじ)」ではなく「(すぢ)」。	おなじ筋(すぢ)のことを、
166	を((お))のづからもりやいでん」ん 思が、	「ん思が」ではなく「と思が」。	を((お))のづからもりやいでん」 と思が、
169	御髮(ぐし)もおちぬらん思ひつる を、	「おちぬらん」との「と」が抜けてい る。	御髮(ぐし)もおちぬらんと思ひつ るを、
171	そのなかにも、少(すこ)しはしづめ 言(い)はむや。	句点の直前の「」が抜けている。	そのなかにも、少(すこ)しはしづ め言(い)はむや。
172	いとあまりにかく言(い)ひなしつる あきたさを思(おぼ)ふにも、	「思(おぼ)ふ」ではなく「思(おも)ふ」。	いとあまりにかく言(い)ひなしつる あきたさを思(おも)ふにも、
175	よろづ思(おも)ひれずがほに、も てなしなぐさめ奉(たてまつ)る。	「思(おも)ひれず」の「い」が抜けて いる。	よろづ思(おも)ひれずがほに、 もてなしなぐさめ奉(たてまつ)る。
179	まして御前(まえ)までは、	「(まえ)」ではなく「(まへ)」。	まして御前(まへ)までは、
179	言(い)ふかひなく思(おも)ひとち めつるさまを、	「言(い)ふかひなく」ではなく「言(い) ふかひなく」。	言(い)ふかひなく思(おも)ひとち めつるさまを、

## 付属資料5 『夜半の寢覚』における修正内容③

大系本 頁数	データの本文	修正内容	修正後
180	いみじう心ぐるしう思(おも)ひけり、	「思(おも)ひけり」ではなく「思(おも)ひいり」。	いみじう心ぐるしう思(おも)ひいり、
180	またなく心やかましと思(おも)ふ	「心やかまし」ではなく「心やまし」。	またなく心やましと思(おも)ふ
181	外(そと)におはするほどにて、	「(そと)」ではなく「(と)」。	外(と)におはするほどにて、
182	水(みず)のながれ、	「(みず)」ではなく「(みづ)」。	水(みづ)のながれ、
190	正月の廿日のあまりの程なれば、	「廿日のあまり」の「の」は不要。	正月の廿日あまりの程なれば、
190	そば顔(がお)なる御心つよさは。	「(がお)」ではなく「(がほ)」。	そば顔(がほ)なる御心つよさは。
190	御言(こと)の葉(は)絶(た)えてすぐ給に、	「すぐし給」の「し」が抜けている。	御言(こと)の葉(は)絶(た)えてすぐし給に、
191	こぼれて、我(われ)ならましとき、	「我(われ)」の直前の「」が抜けている。	こぼれて、「我(われ)ならましとき、
192	あさましきまで、いかに+ と、	「と」の直前の「」が抜けている。	あさましきまで、いかに+ と、
194	なごりとしてどまる男(おとこ)などもなし	「どまる」ではなく「どまる」。	なごりとしてどまる男(おとこ)などもなし
197	青色(あおいろ)の裾長(しりなが)うひきて、	「(あおいろ)」ではなく「(あをいろ)」。	青色(あをいろ)の裾長(しりなが)うひきて、
203	漏(も)りきくやうも侍らん。いとうしろめたう、	「うしろめたう」の直後は句点ではなく読点か。	漏(も)りきくやうも侍らん。いとうしろめたう、
204	遠(とお)くのけて、	「(とお)」ではなく「(とを)」か。	遠(とを)くのけて、
205	いと薄(うす)き青(あお)きが、	「(あお)」ではなく「(あを)」。	いと薄(うす)き青(あを)きが、
205	二重紋(ふたえもん)に織(お)りうかべたる、	「(ふたえもん)」ではなく「(ふたへもん)」。	二重紋(ふたへもん)に織(お)りうかべたる、
222	似(に)げながらぬことに	「ながらぬ」ではなく「なからぬ」。	似(に)げなからぬことに
223	かう思(おも)ひ知(し)りきこえさせぬようは	「ようは」ではなく「やうは」。	かう思(おも)ひ知(し)りきこえさせぬやうは
224	本意(ほんい)かなひてなん、	「(ほんい)」ではなく「(ほい)」。	本意(ほい)かなひてなん、
241	聞き(き)おかせ給へる事あるより	「あるにより」の「に」が抜けている。	聞き(き)おかせ給へる事あるに
257	大皇(おほみか)の宮(みや)の『さもや』の思(おも)しやりにだに、	「(おも)」ではなく「(おぼ)」。	大皇(おほみか)の宮(みや)の『さもや』の思(おぼ)しやりにだに、
262	あさましう、ねたう、心(う)憂(うれ)し	「(う)憂(うれ)し」ではなく「(憂(うれ)し)」。	あさましう、ねたう、心(う)憂(うれ)し
263	うち思(おも)ひできこえ給つゝ、	「思(おも)ひいで」の「い」が抜けている。	うち思(おも)ひいでできこえ給つゝ、
266	侍(ま)たせ給はざりけるよな。	「侍」ではなく「待」。	待(ま)たせ給はざりけるよな。
271	「いまはいかゞは、もてはなれん。」	句点直後の「」は不要。	「いまはいかゞは、もてはなれん。」
279	「いと、いとを(++) (ほ)しと	「と」の直前の「」が抜けている。	「いと、いとを(++) (ほ)しと
287	ものおぼえざりつる殿(との)の(ゝ)御心地、	「心地」直後の「も」が抜けている。	ものおぼえざりつる殿(との)の(ゝ)御心地も、
289	「いづら小姫(こひめ)君(きみ)は」ときこえ給へば、	「きこへ」ではなく「きこえ」、また「給へ」ではなく「給へ」。	「いづら小姫(こひめ)君(きみ)は」ときこえ給へば、
290	むかしの事(こと)もなごきこえ出(い)で給はん。	「給はん」の直後は句点ではなく読点か。	むかしの事(こと)もなごきこえ出(い)で給はん、
307	「なにか、そはさらすとも」	「さらす」ではなく「さらず」。	「なにか、そはさらすとも」
308	こよひばかりをしのび侘(わ)める	「侘める」ではなく「侘ぬる」。	こよひばかりをしのび侘ぬる
308	御文(ふみ)ひきいでたり、	「いでたり」の直後は読点ではなく句点か。	御文(ふみ)ひきいでたり。
312	むかしににもみな様(さま)かはりて、	「むかしにに」ではなく「むかしに」。	むかしににもみな様(さま)かはりて、
316	「ねむのひま、いさゝかあくべきこと	「ねむ」ではなく「むね」。	「むねのひま、いさゝかあくべきこと
328	かく月(つき)頃(ころ)ふる御心地(ち)を	「月頃」ではなく「月頃」。	かく月(つき)頃(ころ)ふる御心地(ち)を
331	げに御心地(ち)ざまもおどろしからぬ物(もの)から、	漢数字「十」とあるが記号「+」とすべきか。	げに御心地(ち)ざまもおどろしからぬ物(もの)から、
338	いと憂(うれ)き御ゆかりの御心(ごこころ)がまへは、みな思(おも)し知(し)る	「(おぼ)」の直前の「思」が抜けている。	いと憂(うれ)き御ゆかりの御心(ごこころ)がまへは、みな思(おぼ)し知(し)る
339	まづ、それいとめづらかなりかし。」	「なりかし」の直後の句点は不要か。	まづ、それいとめづらかなりかし」
340	おどろに申(ま)へべきこと侍(ま)りて、にはかに參(ま)りて侍(ま)りて、	「(まい)」の「い」が抜けている。	おどろに申(ま)へべきこと侍(ま)りて、にはかに參(まい)りて侍(ま)りて、

付属資料6 『夜半の寢覚』における修正内容④

大系本 頁数	データの本文	修正内容	修正後
342	思(おぼ)しめし拾(す)てさせ給 (たまふ)身ひとつこそ侍らめ、	「拾(す)てさせ」ではなく「捨(す)てさせ」。	思(おぼ)しめし捨(す)てさせ給 (たまふ)身ひとつこそ侍らめ、
343	まだはるけき御よゆくすゑを、	「御よゆくすゑ」の「よ」は不要。	まだはるけき御よゆくすゑを、
359	かくれ蓑(みの)めぎたらん心地 (ち)して、	「めぎたらん」ではなく「ぬぎたらん」。	かくれ蓑(みの)ぬぎたらん心地 (ち)して、
360	現(うつ)ともおぼえず」	「(うつ)」ではなく「(うつゝ)」。	現(うつゝ)ともおぼえず」
363	空(そら)の氣色などをも	「などをも」の「を」は不要か。	空(そら)の氣色なども
365	侍(ま)ちうけては、	「侍」ではなく「待」。	待(ま)ちうけては、
366	こなたにわたり給て、紅葉(もみじ) の	「(もみじ)」ではなく「(もみち)」。	こなたにわたり給て、紅葉(もみ ち)の
373	苦(くる)しかるべきまゝに、よろづ を	「よろづ」ではなく「よろづ」。	苦(くる)しかるべきまゝに、よろづ を
373	話(かた)らひつついて、	「話(かた)らひ」ではなく「語(かた)ら ひ」。	語(かた)らひつついて、
387	まかせて御覽(らん)ぜよ。」	」直前の句点は不要か。	まかせて御覽(らん)ぜよ」
389	下ざまなりける人なりけり、	「なりけり」の直後は読点ではなく句点 か。	下ざまなりける人なりけり。
392	くるしさをもそふる地(ち)すれ	「地(ち)」の直前の「心」が抜けている。	くるしさをもそふる心地(ち)すれ
392	「など、つきせず飽(あ)かずのみ 思(おぼ)して、	「など」の直前は「ではなく」。	「など、つきせず飽(あ)かずのみ 思(おぼ)して、
393	月日の光をならべたるやうにこそ あらましかど、いかゞせん。	「いかゞはせん」の「は」が抜けている。	月日の光をならべたるやうにこそ あらましかど、いかゞはせん。
397	うち見給(みたま)ひて、「いかで +、	「いかで」直前の「が一つ足りない。 +、	うち見給(みたま)ひて、「いかで +、